

第20回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第20回「文芸思潮」現代詩賞

第二〇回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで二三〇名の方から六四四篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通じた作品を対象に、十月三十日、渡辺みえこ、五十嵐勉の二名の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。

授賞式につきましては、申し訳ございませんが、たぐいまれな検討中です。佳作以下の賞状・賞品などは明年二月上旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第二十一回「文芸思潮」現代詩賞は、これまでと同じ要領で明年また募集いたします。どうぞ奮って御応募ください。
〔文芸思潮〕現代詩賞選考委員会／文芸思潮

最優秀賞

該当作なし

優秀賞

「熾きる」「液体」「凍土」

三日月ユキ(京都市左京区)

「ラストセイリング」「サイバー空間」「細胞とトランジスタ」

柏原 宥(埼玉県川越市)

「弔い浸透圧、廻せ黒棧トート」愛犬ロビンに捧ぐ」

岩尾宏紀(大分県速見郡)

「鑑真」

清水一美(東京都立川市)

「胸は雪の嶺を越えようと」「まだらな青い時」「木立のなかで」

森下万尋(千葉県市川市)

「モノクローム」「Bullet」

インバ(奈良県奈良市)

「こいにはいないひと」「沈んでいく舟を送るにも似た儀式でうむ」「ひかるせと」

橘いづみ(鳥根県出雲市)

「或るレポオト」「嫉妬」「素足の季節」

光枝初郎(岡山県倉敷市)

「寄留民」「座喜味城」「拝所」

幸地チカソ(沖縄県中頭郡)

奨励賞

「熱の憶え」「parity」「濾過」中村郁恵(北海道札幌市)

「Made of the World」「A Piece Of」「言ひなご」bluemoon(鳥根県松江)

「月下火葬」「流竄された病蠶」曲田尚生(静岡県富士市)

「春」「ひとりぼっち」「斬首」後藤 順(岐阜県岐阜市)

「面影」「夕立の向こうに」「命の奇跡」

田咲恵子(神奈川県川崎市)

「へびのうろこのマーメイド」「猿夢未遂」「代償リボ払い」

槇冬弱虫(東京都三鷹市)

「鱗」「貝」「あたたかく流れる」

渡辺八畳(東京都西東京市)

「森の中を彷徨う」「天使の仲間」「旅の途次」

遠藤芳子(東京都狛江市)

「海辺の遠景」「舟路」「壁」

関根怜(茨城県ひたちなか市)

「それからの誕生」「目覚め」「世界公園」

徳丸魁人(愛知県安城市)

「灌水に紡ぐ」「再開」「攪拌する」

久利潤保(福岡県久留米市)

「せんちめらたるじい」「廃団地」「あか」

わたなべ(新潟県新潟市)

「電脳浄瑠璃アルミホイール」「川柳泥棒」「ナイトクリーニング」

赤橋梗生(東京都日野市)

選評

詩を書くということ

渡辺みえこ

今回も様々な場での強い詩の声が伝わってきた。それぞれの個性による詩の言語、形式に精進の跡が見受けられる。現代日本では、情報も多く、ゲームや漫画……など没頭できるものも多い。その中で短い言葉と形式で表現する詩を選ぶのは何故だろうか。時間に流されずと立ち止まって自己の中に沈殿している言葉に至らない経験、それに自分なりの表現形式を与えフロイトのいう喪(メランコリー)の儀式のようなものをする行為でもある。己の経験を、自分だけの言葉の形式にして提示してみる、生きている自身の一瞬を大切に抱えて詠嘆する、そのような作詩行為もまた大事な経験であろう。

詩作に向かう時、伝わらない、理解されないというもどかしさはどこかにあろうが、拒否や疑念がテーマであっても発表するのであるから読者に伝えることに留意する必要がある。特殊な言葉は注を付ける……など。

今回もそんな伝達に向かう言葉の経験が集まってきてい

奨励賞

「焚書」「孕んだ腹裂いたらあ鋭」「冥土のスーパ」

野葛間 (長野県上田市)

「空」「魚の目」「呼吸」 坂田康雄 (静岡県浜松市)

るのを感じた。

知識や情報、創作されたものから得たものは、空虚な言葉の羅列や、大言壮語になりやすい。新奇な形式よりも、自分を見つめ、自分の感性を大事に書いてほしい。怒り、悲しみ、「私」のなかの他人に理解されない孤絶しているもの……などを掬い取って形を与えてあげることも作詩の喜びの一つだろう。

商業的に創作されたものは、読者に高揚感を与えて完結させている。それを詩のテーマにするのは、二次的創作になりがちなので直接に現実と触れ合ったものが創作の現実感(リアリティ)が出る。

意味を伝達する必要がある時は仮名でなく象形文字の漢字を使うのが良い。

優秀賞の三日月ユキ氏、「熾^おきる」は、熾^おきていた「おかあさん」や「私の火」であることの比喩が的確で詩言語が生きている。「母」「子ども」「私」の闇の部分が、三

日月氏の身体リズムの語りによって、会話や擬音は生き生きと流れを作っていて、多様な口頭(オーラル)物語芸能の系譜が感じられる。

「熾^おきる」の十連「続きは 居なくなった のではない」は、説明的でもあるが、意味は掴みにくい。このような状況を具体的なものを活写して、語りの流れを一瞬食い止める部分があってもよい。

「液体」の五連の「道端でぶつかった男に浴びせられる罵声／おんどらあしばくぞこら ぶっころすぞてめえ／びちゃつと泥を投げつけられるような」は「戦時を生きた祖母の最後の一滴は」の痕跡(トラウマ)に続く連としても、六連の水の生物としての人間存在の考察を導く、発端としても軽いのではないか。「戦時を生きた祖母」には計り知れない痕跡があるだろうし、「何度でも／生みます／液体として けつしてなくならない小さな海として」と宣言する著者にもあるであろう「痕跡」が表現されているとさらに良い。

禁止で始まる「凍土」も力強い詩語に満ちており、最後に逆説的肯定でウロボロスの円環を完成させているが、具体的場が想像できるとさらにイメージが結びやすくなる。イメージや詩語が溢れているので今後の詩作も楽しみだ。

同じく優秀賞のインバ氏は、「Bullet」の一連の始まりがよい。どんな詩も一連や、始まりの一行目は大切である。

その詩全体を象徴し、読者にその詩を読ませる意欲と期待を持たせる。「Bullet」の一連は以下のように始まる。「わたしの心臓には／彼岸花が宿っている／厳かに 脈々と根を張るように／真紅の花弁が 咲き乱れている」と的確な比喩を使った内面表現に始まり、二連では、「冥府」という具体的な場が設定され、やがて内面を表現し、記憶が展開され、最終連では、一連の「彼岸花」が総合的な形で循環し、しめくくられる。まさに古典的交響曲のような形に整っている。しかし五連目での比喩の類型的表現は注意が必要だ。「星のように瞬く街灯」「銀色の雪」などは、一般的な比喩である。詩は自己の中に起こった特別の感じ方の表現を探ることなので、このような表現は避けたほうがよい。また八連目の「意味のない問答／答えのないイフ／」は、その前の七連の「――もし あの日 あなたの手を握っていたら／――もし あの日 あなたに心臓を捧げていたら」という重要な疑問が提出されていて、その悔恨、悲しみは読者に伝えられているので、それを同じ詩で答えをだしてしまうとその重要さが消されてしまう。この二行はないほうがよい。

「モノクローム」は、宇宙的な視野で豊富な言語が連打されている。「生命の慟哭」「惑星の憐憫」など異なる意味の壮大な漢語の結合は、激しさは伝わるが、意味は拡散して、空漠としたものが残る。豊富な言語の噴出を少し抑え

て、大事なイメージを中心にして、それから広げていったら、多くの詩群ができるのではないだろうか。

森下万壽氏、「胸は雪の嶺を越えようと」静かな視線の移動に安定感があるが、三連目の展開で「傷痕」とはどんな傷痕かなど、読者に具体的に感じられるように表現されると、全体がもう少し強くなるのではないか。「まだらな青い時」も整った美しいイメージの詩である。「木立のなかで」は流れるような文体のなかに、「真春」の風、香りなどが現実感をもって感じられる。

岩尾宏紀氏、「甲い浸透圧、回せ黒棧トート」愛犬ロビンに捧ぐは、ポップカルチャーの身近なものをコラージュ的に唱え、愛犬ロビンへの哀悼としている。ロビンの側からの視線も入れるとロビンとの関わりや、一体化、相対化ができるのではないか。

清水一美氏、「鑑真」は、日本の伝統美のさらなる深まりがある。鑑真の姿、行ない、その静かな輝きが表現されており、清水一美詩世界を作っている。もう一歩進めるなら著者自身を入れて、鑑真の影響などを現代にも繋げるとさらに広がりが出るのではないだろうか。

光枝初郎氏、「素足の季節」は、南ヨーロッパの神秘的な光景が、乾いた風とともに一瞬よぎる、そんな幻影が表現されている。もう少し著者との関わりが書かれれば学術的にはならないだろう。

も「魚の目」も、詩的着想はよいが短いのもう二連ぐらい加えて、例えば地球との関連などを入れて広げるとさらに良くなるだろう。

「呼吸」は、一呼吸に「命の歴史」を感じ、また「木々の若葉」や「この星が自転」することにもつながると感じるアニミズム的感性は、詩の魂であろう。最終連の「ああ／奇跡の一呼吸に／空を一つ／いただいた」は命と宇宙に対する讃美である。さらにこのような詩を書いていってほしい。

中村郁恵氏は、主婦の日常から物とのきめ細やかな交感を描いている。誰も素通りするようなものの性質を大事に見つめるのは詩の魂の一つだろう。

「熱の憶え」は、家事の用具への感情移入と愛情が深く表現されている。この用具の「名」が最初のころに出てくると読者もさらに感情移入しやすい。「濾過」は、削りがつおをこのように見つめた人（詩人）は、かつていなかったと思う。「ひとひら」の「削りがつお」から「育った海」まで思いを馳せてやる、これは命ある生き物を食するものの倫理であろう。

イヌイットはアザラシを全部たべるのだが、永久凍土のアザラシには、魂があつてその再生のために全身を進んで人に投げ与えるのだとそこでは信じられている。イヌイットたちは、拡大家族や友と分かち合つて深い信頼の供食を

橘いづみ氏「沈んでいく船を送るにも似た儀式でうむ」は、「うむ」には多くの異なった意味がある。行為としての出産と、一般的な生むを分けたほうがよい。十三行目「わたしたちふたりして羊水に辿り着く」など詩的なイメージを喚起するよいフレーズだが、どんな「わたしたち」か、関係は、など少し書き込まれていると読者が、さらに深く詩の流れに入りやすい。

柏原宥氏、「細胞とトランジスタ」は、「炭素」に対する思考だが、全体が詩、寓話になっている。人間の文明のパロディーでもあろう。「サイバー空間」はエッセイでも書けるのではないか。

幸地チカソ氏、「座喜味城」は、南の城の空や空気が伝わってくる。擬音も一般的な音ではなく著者の音感が響いてくる。詩は日常的な伝達的手段（散文）ではなく沈黙さえ表現する文芸形式だが、その詩に耳を傾ける読者にはぎりぎり伝えられる情報は必要だ。「座喜味城」も「拝所」も註が欲しい。「拝まれ」る側からの視点で見たのは新鮮だ。

奨励賞の坂田康雄氏、「魚の目」は居酒屋で魚の目に気付く、そこに「北海の刺すような空の青さを見つけた」という感性は詩そのものだ。生きている日常の中で詩を感じることは、詩を生きることもある。「空」「水が一雫垂れてきそうな」は坂田氏独特の感性でよい。「本当は知っているのに」は説明的、散文的でないほうが良い。「空」

行う。そうしてイヌイットの魂の再生を助ける互酬的關係が結ばれており、受け手としての人間も野生の魂に生かされるのだという（大村敬一『カナダ・イヌイットの民族誌』日常実践のダイナミクス』大阪大学出版会、二〇一三年）。「母の聲」も母から娘への台所の優しい系譜が感じられる。今後も生き物とともに生き合い、語り合う共生の詩を書いてほしい

「party」は、詩の中に数字を入れて、読ませるには工夫が必要だ。三連、四連は数字が比喩的に詩になっている。

野葛間氏、「焚書」は、主張と形式が合致している。朗



渡辺みえこ

わたなべ みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。2009年第59回日氏賞詩集賞選考委員。2015年第47回横浜詩人会賞選考委員長。詩集

『耳』詩学社1972。『喉』思潮社1982。『声のない部屋』思潮社2001。『水の家系』南風プレス2002。

『空の水没』思潮社2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。

文芸評論『女のいない死の楽園—供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊 現代書館発売1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

読をしたら発語の緊迫感が伝わってくるだろう。五連からのリフレインは、同じフレーズの繰り返しでなく少し転調するとよい。「孕んだ腹裂いたらあ鈍」の言葉遊びには少し無理がある。「冥土のスープ」にも言葉にできない恨み、哀しみが、吃音のように表現されている。同義反復を減らしていくとさらに緊張感が出てよい詩になるだろう。

わたなべ氏は、「廢団地」の一連目を「誰かに蒔かれて忘れ去られた／小さな種が芽を出した／」と、古びていくものの中の新しい生命への注視が鮮やかに表現されている。中村草田男（一九〇一年―一九八三年）に「筍の鋒高し星生る」という句がある。星にも届くほどの生命力を詠んだものだ。「せんちめらたるじい」は「夜の田んぼ」の人のいない薄暗い不気味な風景が良く表現されている。題は読者に伝わるようなものが望ましい。

赤橋梗生氏「ナイトクリーニング」は、軽快な比喩にユーモアもある。四連のリフレイン形式が孤立しているので最終連にもこのような連を作って呼応させるとよい。「川柳泥棒」以下の四連目が良い。「道端に捨てられた水たまり／何気ない誰かの一步で／踏みつぶせる青空があった／言葉の可変性は人を殺せますか」、このような見方は、詩の視点だ。青空も一つの世界だった。「何気ない誰かの一步」が、やってくるまでは。それは歴史の偶然のようなものかもしれない。「言葉」はイデオロギーを作り、それは人を

第二〇回現代詩賞は全体に熱気が感じられ、優秀賞、奨励賞の領域は豊漁で、力作が犇き合っていた。ただ、突出して気迫に満ち、その結晶度において断然輝いている作品はなかった。残念ながら、最優秀賞は該当なしという結果になったが、代わりに優秀賞、奨励賞の層はこれまでになく充実していて、粒揃いの重みを持った。積極的な表出のパワーが溢れていた。

特に常連の詩人たちが、意欲を持って作品を投げってくる前進感が感じられ、層を厚く、かつ熱くしていた。岩尾宏紀氏、インバ氏、柏原宥氏、清水一美氏、橘いずみ氏にはいつも以上の重みを感じられ、あともう半歩というところまで最優秀賞に肉薄していた。また別に熱気を高くしていたのは、三日月ユキ氏、森下万尋氏、光枝初郎氏、幸地チカソ氏の新人グループで、これも挑戦意欲が漲っていて、この層の波を高くしていた。優秀賞の数はおそらくこれまでに比べて多いのは、当然の結果である。

優秀賞の岩尾宏紀氏は「歪 Under OXX」など、持っている表現技巧を最大限に發揮して自身の詩世界を頂点目指して駆け昇らせている。それはこちらにも伝わってきたし、迫力に満ちていたが、名詞止めの多用が少し表現を硬くし、流れを小さくしているのが惜しまれた。これだけの詩想なら、もっとうねりや展開を大きく繰り返し広げることが、大規模な投擲になるはずである。進化は感じた。固く留ま

殺しもする。

曲田尚生氏、暗く先鋭化したテーマの表現形式を、視覚詩や、古典的言語で探っているのだろう。「流竄された病蠶」では、流竄された身を莊重に詠っている。表現したいテーマがあるようなので豊富で美しい言葉が観念的にならないように、例えば病蠶と革命などテーマを絞って凝視したら多くの詩ができるのではないだろうか。

渡辺八景氏「鱗」幼い日に鉄粉を吸ってしまったから」は、人が抱える孤独、「輝き」さえ傷つくことである痛みを、「鉄粉」という異物が入り込んだことでの苦悩と捉えることには、象徴的意味がある。鉄粉を持たない人々との比較、自然、風景との関係も表現することで「自分」がさらに明確になるのではないだろうか。

徳丸魁人氏、「それからの誕生」は、光から生まれた鳥が、最終連の「朝の光を、半身でしんじ」る「胎児たち」の「羊膜の国」の世界での一面を書くこともできるだろう。「よりよい暮らし」というような表現は日常的、常識的な意味にとらえられがちなので注意が必要だ。

力作が犇めき合う

五十嵐 勉

らずに、柔軟に、ダイナミズムを生かすよう工夫してほしい。清水一美氏は、自分のフィールドにカムバックしてきた印象があり、やはり歴史や仏教に根ざしたこの領域が落ち着くのか、長所を十全に生かして、「鑑真」という歴史の中の聖性を再現している。試行錯誤の果てにこうしてまた戻ってきた詩想は、なんらかの深まりや根が新たに付与されているはずで、ここを新たな基点として、さらに踏み出してほしい。

柏原宥氏はもともとコンピューターの無機質な世界の深層を覗いて、その危機意識の上に詩の世界を構築している立場である。今回はその世界をさらに敷衍し深化させて、生物の存在そのものと対峙させるところまで危惧を延ばしている。「進化」という名の一艘の航行」「論理回路のオンとオフ」など、コンピューター世界の根幹の危うさを、



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79 「流竄の島」で群像新人長編小説賞受賞
98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンちゃん、NONGCHAN／聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

詩の言葉として感じさせる。他のだれもこういった角度からの根本的危うさを警鐘していない。スノーデンの訴えた恐怖にさらに深く繋がっている。稀有で、貴重なポジションである。今後さらに深化させ、危うさを知らせてほしい。

インバ氏の「モノクローム」は、これまでよりもはるかに強烈な詩象を展開している。「神の証明を拒絶する歯車」「時間の逆行を許容する螺旋」など、そこに込められた思いの強さは真摯で胸を打つものがある。ただ、やや型にはまった抽象表現や名詞止めの多用が目につくので、名詞止めの表現を少なくし、もっと流れを作り、その戦慄に沿って盛り上げていく技術が加われば、もう一ランク上へ行くだろう。

橘いづみ氏の詩には深化が見られ、詩想に加えて流れもうねりも大きくなっている。「昼間の月」「わたしの血を継ぐ魚」「いまつみなおすから」など、魅力のあるフレーズも多い。ただ、紡ぐ力に任せて流れを作っているようなので、人にわかるようにはつきり構築する意識も持つてほしい。連を作つて構成するとか、盛り上がりの後半部作るとか、その上でもう一度テーマを明確にして築き上げることができれば、より深い感動を呼ぶだろう。深化は称賛するが、それが万人の胸に届き、感動として伝わるようにするには、もう一つ構築力がほしい気がした。あと、タイトルに詩のテーマが象徴されていないことを感じる。タイトル

の言葉自身も、詩のテーマと共鳴して響き合うように工夫してほしい。

ニューフェイスでは三日月ユキ氏の詩に強い刻印を感じた。母親の回顧に生の慙愧を想起して振動させる思いの強さは、特筆すべき鋭さを有している。魂の中の後悔や無念さを熾火に例えて燃焼させる着想は、優れている。現実にかような形でこの世に残る魂もありそうだ。それを詩の世界に引き寄せ、再現させる力は、並々ならぬものがある。ただ、不用意な繰り返しがあったり、擬態語がたくさん使われていたりするのはいただけなかった。そういう部分を削り、抑えた言葉で表現しきれば、最優秀賞に届いたかもしれない。評価と欠点とが同居する作品だった。パターン化と擬態語などの安直な言葉の遣い方をとりあえず大きくす方向に留意すれば、一段と飛躍するだろう。

光枝初郎氏の詩は、リズムに乗った流れは快く、言葉の常識的な繋がりを裏返していく一つ一つの詩句には快い説得力があるが、よく読むと真の破壊には到達しない切っ先の浅さが目につく。良質なワインを飲むような酩酊感はあるものの、現実には波及してくる狂気のような鋭さはない。うまい詩ではあるが、斬られるような烈しさは迫ってこない。趣味の高い技巧が前へ進ませるのだが、底を脅かされるような危うさはなく、安全地帯に留まっている。一歩前進するための何かを身に着けてほしい。

この技巧と表現をどうしたら、天空への飛翔感に上昇させることができるか。課題でもあり、希望でもある。

奨励賞では特に徳丸魁人氏、中村郁恵氏、後藤順氏、久利潤保氏、Blunnon氏が印象に残った。これらの中には優秀賞でもおかしくなかった鋭気があり、私は注目した。徳丸氏の詩は「世界公園」「それからの誕生」など力作だったし、中村郁恵氏の詩にはこれまでの台所などから世界の裏が見える視点が、大きく展開されて外界へ出ていく積極的な広がりを感じられた。久利潤保氏も「再会」「攪拌する」には先回よりも一歩前進した拡充感を感じられた。後藤順氏は「斬首」だけはきわだってよく、平易な言葉のうちには鬼気迫る詩世界を成立させていた。Blunnon氏はペンネームだけではなく詩のタイトルも英文字横書きで、違和感もあったが、「私は世界でできている」など斬新な感覚に訴えるものを感じられた。

全体として、豊饒感のあった今回の現代詩賞だが、雄勁さを備えた上に純度の高い結晶感を果たしている作品が見られなかったのはきわめて残念ではある。こうしたことを契機に、より深く、より高い作品作りをめざしてほしい。世界をぶつた切るような詩を期待している。

幸地チカソ氏は沖繩という地に立脚点を得て問いかけが穿ちを深くしている。光枝氏の詩とは対照的で、逆に技巧も快い流れもなく、ひたすら問いの深さに詩の言葉を託している。これは詩作の経験の差にもよるのだろうが、生き方にも関係があるように思える。とつつきにくく、よく読まないといわれない咀嚼を要求してくる詩であるにもかかわらず、その底に漲る世界への問いは切実である。「赤黒さ生臭さと／抱き合うとき／わたしはたしかにここにいて／わたしはわたしをかたていい／かたていいと／しずかに／ゆるされる」というところなど、迫ってくる。深く問うことが幸地氏の詩であり、生きる意義を求めるところにその源泉がある。技巧としては稚拙だが、高い格調に達する可能性を孕んでいる。もつと沖繩の風土と一体化したとき、それが可能になる気がする。

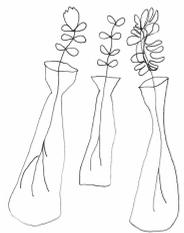
森下万尋氏の詩は技巧に富んでいる。鍛えられた表現はほとんど隙がなく、「光りの虫たちが狂飛する」とか「判決の梁にぶら下がる 心臓」とか、「日々を食いちぎる飢えた獵犬」とか、刺激的な言葉のちりばめが煌びやかに流れを進めていく。その技巧はある水準を超えている。しかし全体が小回りで終わっている。楽しめるが心臓を掴むこととはない。それは一篇を手際よく一枚で終わらせるような整いにも表れている。またタイトルももう一つ結晶感がない。「またらな青い時」などイメージが明確に結ばない。

佳作

- 「詠う瘧のままごと風景」「眠る指先に」「肺に落ちる寝息も」 今井葉子
 「二十二億分の一の詩」「正しい地獄の作り方」「残波」 千葉紫月
 「ペトリコール」「竹林」「右手」 佐山由紀
 「涙と水爆」「珈琲に浮かぶ虫」「運命」 北川 聖
 「ハッピーバースデー」「売家になる」「ドライブ」 ぶきのとう
 「行路死亡人」 志田 恵
 「年輪」「絶望」 佐々木漣
 「冬と旅人」「実存の彼方へ」 黒田裕美子
 「シュレーディンガーの猫」「異次元獣」 柳柳太郎
 'humour」 キネブチタツヤ
 「譚歌」 中沢人鳥
 「くじらの歌」「夏鳥」「空色」 片岡周子
 「記憶」「身体」「液体」 宮原透夏
 「月夜」「発熱」「硝子の花」 河口國江
 「プロレタリアートの絶滅」「予行練習」「三百年の成せる技」 河川 聖
 「SHIBUYA.rainy-day:」 「taberu.」 「ハートとやら」 サカイ遠雷
 「コトリ」「一つの希望」「燃える夕暮れ」 優木絆名
 「カラクリ」「凹」「無音軌道」 薬師丸怜央
 「春は病」「浄化」 てづかかなこ
 「西新宿のブルーベリービル」「アスファルト・パレットは何色？」 北村灰色
 「それは」 うみのひつじ
 「手持ちの楽器が無いのなら」「馬の国から」 後藤敏斤
 「透き通るほどに」「わたしは死」「窓ガラスの割れていない空き家にて」 有原野分
 「一陽」「十月宵」「新世界」 南斗るい
 「恐れるへその緒」「とある未来」 藍原知音
 「君を惜しむ」「マッチング」「舟をこぐ」 実川阿仁
 「贖罪」「恋悲」「業火」 琴森 戀
 「追憶と忘却の間で」「花瓶の口に紅」「蝕」 藍羽由宇
 「風呂場」「ふてくされた箱」 色透ふう
 「バードストライク」 若林麻衣
 「チャンコチャンコ」「下へ」「風葬」 齊藤航希
 「女神に首を絞められたい」「ポプラ」 春町桃花
 「夏色」「職人」「白い月」 花井 満
 「開かれた眼」「零れ落ちていったすべて」 宮澤なずな
 「セイ」「通っていた雄魅せは今」「単なる馬鹿」 右利き

入選

- 「願い」「折り合い」「今ひとひら」 有澤かおり
 「心の視力」「大根にしみこんだ幸せ」「痛みは今も」 塚 永行
 「白」 もり・さとこ
 「SAVANNA」 南雲和代
 「十二月のアベリア」「うしろ姿の」「冬の花みずき」 中牟田桃園
 「生きるということ」「空を見上げて」 美波
 「骨箱」 大石さち子
 「巡り生きゆくモノよ」「書かれない敬具」 cofumi
 「薄紅色の風に吹かれて」「失い彷徨う者達へ」 三浦恵子
 「サヨナラAI」「道の説明」「冷蔵庫の中のアルビノの花」 南原魚人
 「ラーメン屋」「暴れ馬には腐った自由を」「グロテスクな○○」 地伊田月夫
 「青春の光と影」「調和する旋律」 阿部静雄
 「せいかつほごしんせいちゅう」「辛党のあなたへ」「マチ」 緒方水花里
 「篝」「燈」「焚」 ヤス
 「爪」 井口牧子
 「贅沢な歩き遍路」「風のともしだち」「カーボン」 村上文緒
 「宇宙からの電話」 天ヶ谷麗
 「被害者罪人」「遅い学び」「牧歌的な店内」 麻倉 潤
 「魔法が解けて」「白いグラジオラス」「時に愛は」 高倉麻耶
 「下り坂」「死別と歌」「許容」 片桐こげち
 「神託」「参列」 20240101」 鹿島 楓
 「夏」「靴」「塔」 丘田 青
 「存在」「ある母の最期の二行」「最期の一行」 星原理沙
 「夜に沈む」「私のソレは私の悲しいが大好きだから」 銀森そのみ
 「降ってくる悲しいこと」
 「ヴァイオリン」「すいそつ」 こやけまめ
 「すかんぼ」「ほしをななつほど」「よきこと」 いまだまりこ
 「境界線」「香り」「五月病」 ドロシー
 「心の鍵」「暮れの夕暮れ」「過去の恋人達に告ぐ」 柏村ねお



熾おきる

三み月とユつキき

真夜中に 独り 熾おきている

日々の灰の中に埋み

途切れた声の

あああかかかかささたたなな

ハハ ママ ヤヤ ララハ

続きは 居なくなった のでは ない

くらやみ 夜 だれも見えてはいないから

生命をひらいて酸素を吸う

吹き付ければ ぱつ と破裂して

四方の壁へと影を躍り上がらせ

火の玉になる

おかあさん

まだ

熾おきてたんやねえ

しんどかったねえ

くやしかったねえ

くやしかったねえ

眠れぬ者眠らぬ者 いびきの部屋で日々を黙って畳み

残っている食器を洗い しまい ごみを拾い片付け

白装束につつまれて出ることのできなかつた角は

脳の中で腫瘍になり ほそくほそくなつた神経が

ぴいん と張りつめたピアノ線になつて

もしこの線がみえるなら起き上がって

厠に行つてごらんなさい その首が

ざりつと赤い切口をさらすことでしょう

還り給え静まり給えシート深く鎮まつて
手足とからだの折り重なるところへ
その火かききえて沈んでゆけば
善い人やったねえ
と大団円に

なれない ならない まだ 熾きている
空をひたし髪を撫でるうつくしい無彩色の風には
夜は深くまちの地下へむらの地面へ堆積し
どろどろと流れ 時をわだかまらせる
——ふえつえつ えつえつ と子が泣きだす
抱くと泣きじゃくり小さな手で押し戻す
——いやっいやっいや アッチイッテ コナイデ
いや いや いや いや コナイデ コナイデ コナイデ

気が遠くなる体の中で心臓が燃えている
ごめんね
いやだったねえ

いやだったねえ
体につつかつてくる手足を耐えている間も
熾きている 熾きている

続きは 居なくなつた のではない
真夜中の酸素はくらやみのぶんだけ濃くなる
見えない奥底で沸騰し続ける熱ごと
まだ熾き続ける

例えばまよなか 泣きぬれるさえ許されなかつた彼女の痛み
わたしは まだ 眠れない眠らない
いまでなくても ここでなくても 私の火
いつか撒き散らす色彩をたくわえ
徐々に迫ってくる かわいた朝にも見失わないよう
疲れ切つた背筋を伸ばして
まだ

熾きて
いる

受賞の言葉

三日月ユキ

夫や祖母、子どもたちといった身近な人や、
であった・であつてしまった人々の肉声は、私
にとつて心に深く刻まれるものかもしれませ
ん。今も昔も苦難と争いの世界の中、いかに向
き合ふか日々悩みながら、胸をうつものに感覚
を済まし、大切に書いています。昨年に引き続
きお目にとめて下さり、今回は受賞作に選んで
頂いて、心から感謝しております。ありがとうございます。
精進して詩作に臨みます。



三日月ユキ

みとづき ゆき

1981 奈良県生まれ
大阪芸術大学大学院文学創作専攻博士後
期課程卒業
会社員
同人詩誌「Rosa と kernel」 会員
2023 年日本現代詩人会投稿詩欄（秋
期）佳作入選
文芸思潮現代詩賞入選
2024 年コトバスラムジャパン東京中央
大会優勝、全国大会出場
コンピレーションアルバム「Eloquence
DesMots(SaisonLisode3)」 参加

弔い浸透圧、廻せ黒棧トート
 (愛犬ロビンに捧ぐ)

岩尾宏紀

上下左右包囲したSUS底鉤
 拝謁911秀逸パブプロフの犬
 秒で反応パンク魂シユガーレス
 甘くない儂い美と奇と血の詩
 瞬時注ぐ円周と命はチート級だ
 バミューダ三角形にも消せない
 theToteModel K 黒棧PUNK仕様
 ショートステイ どうしようも
 捨て置く危篤の憶測

Model K
 theClutchM' BoxScustom 収納可能
 BagInBag&BackToBack 順応溢れる慕情
 常時、事象は座礁し済んで燻んで鑑みて
 漆は瞳、黒真珠のように潤んで

長さ40cmの細いハンドルを
 二点で留めた底鉤が外れて落ちる
 拾って締め直す徴候

刈入れ時は概ね三月 書割にして尾根結び
 早稲蜜柑のモチーフ挽ぎ
 手狭な離反、器用なりズムで
 ラクリエトート、ブン廻す
 反復の日常非日常 再び久遠の旅へ 当面
 ずっと出番だバンパータのトート

鳥除け網の向こうに控えるワイヤーは
並行宇宙の切り取り線

Model Kの回転、仮初に加速

世知辛い四阿より鬼没既視感

銀髪美犬ロストの我々に

出迎え無い午後8時が

容赦無く押し寄せる

↓

① とるに足らぬ、「今」から撤退

② とどまり、専用悲壮の咀嚼

双方続行、弔い浸透圧

弓状の鳥国に激しい線状降水帯が覆う

この世界線はロビンの死を悼み、泣いている

号泣、嗚咽 あたりは霧と煙る

「もうそのへんにしときなよ」

否応無く 晴れ間から切れ目なく梅雨明け

ああロビン、死んでも美しいだなんてあんまりだ

認識できるかサイドキック、完璧な犬生を弔う回転去来

慎み深く廻れ黒棧トート おくる側など束の間

いずれ新鮮な林檎、沢山持つてそちらへ



受賞の言葉

岩尾宏紀

現代詩賞優秀賞受賞ありがとうございます。大学生の頃、課題で「月」というテーマで詩を書いた。「月の光」より「月光」の方が胸に迫るといふ様な事を稚拙な言葉で綴った。だが恩師Yは深読みが過ぎる程に読み解いた。僕は主戦場を見つけた！あれから30年。お陰でこの有様だ。面白おかしく生き抜く事に必死だ。付かず離れず側にいる影、相棒の様な詩。愛と恨みとほんの少しの感謝を込めて。30年後、あの世でまた飲もう、恩師Y。

岩尾宏紀

いわお ひろき

- 1975 大分県生まれ
- 98 大阪芸術大学芸術学部文芸学科卒業
- 99 現代詩手帖新人枠数回掲載、早稲田文学賞候補
- 2000 浜崎あゆみ「SEASONS」リミックス
- 05 就職
- 20 第16回「文芸思潮」思潮現代詩賞佳作
- 21 第17回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
- 22 第18回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
- 23 金澤詩人賞入選
- 第19回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
- 24 第20回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞

寂けさまとう
 今朝の袈裟
 千年のしじまを
 盲いたまぶたに
 滅するいろは
 においおこす
 暁くたち茜しく
 時のきわ
 独り見とおす
 あけの創めはじ
 あおしく星の
 約された地へ
 のぞむまなざしに
 悠とくみあらわし
 尽ときることない
 雲の光儀すがた
 かしこを流れ

ここにおわす
 いずれからとも
 わき上がる
 ひと筋のいのり
 定まりない
 いろをみにおい
 あおにおう背
 妹かおる雲と
 生まれぬ前さきの
 巡り会う汀に
 立ちもとおり
 潮わたるはたて
 千古の汐の呼こゑに
 わたくしをたずねる
 雲わきそそり立つ
 あおのおくか
 漆黒のひびきに
 ゆれまどう波間
 しるべない路に
 いのりおこす



光を失おうとも
潮騒ぐいずれの
空にかよびすます
あおおう光儀に
わたくしたちは
であいを重ね
ついでるわたくしに
あける前の
新たに立つ波を
破船はわたり続け
ともに去る
潮のなごりを
みよしにあける
雲たまう地に
たまばな円かに
咲かせわたくしたちは
地をそそぐ水の
流れる環となり
ひとよいくよ
接ぎつなぐ

かおるまみえに
ほほえみは約す
場はわたくしたち
ひしがれた人の
失われた空の下
樹下にひしぐ人に
伸べる緑陰にさす
光もよい
あおのこもれる
朝露の閉じたさかい
水琴窟かなでる
いく重もの漆黒に
落下は生まれ
めざめをうながす
はるかな呼に
ことばをすます
人とひとのあわい
あおをおい
雲は流れ



清水一美

しみず ひとみ

1960 青森県八戸市生
大学入学とともに上京
英文科でジョン・キーツ、日本文学
科で堀辰雄をそれぞれ卒論として専
攻
文学を志し、アルバイト、フリーの
校正者で糊口し、森敦「月山」を追
体験すべく八ヶ岳の山小屋で越冬
下山後、某通信会社系列の契約社員
となる
奈良と縄文をテーマに詩作を継続中

受賞の言葉

清水一美

鑑真和上との対面は十年程前になりますでしょうか。場所は奈良唐招提寺。御影堂の東山魁夷画伯の障壁画「濤声」の奥に静かに結跏趺坐しておられました。打たれたように、わたくしは容易にその御前から離れることができませんでした。遺徳を感じ取りたい。そう念じ対座しつづけたのです。



モノクローム

——虚ろなる神々は 深淵から鳴り響く喝采を聞いた

紺碧の空を引き裂きながら
巨大な十字架が浮かんでいる

空虚な虹色の光彩

血管のように脈動する紋様

透き徹った紫水晶の外郭

中央に埋め込まれた紅玉の単眼

其れは

神の証明を拒絶する歯車

時間の逆行を許容する螺旋

有限を否定する無限

無間を肯定する幽玄

茨の王が取り除かれた 空席の玉座

地上の喧騒は蟻のごとく

生命の慟哭は蠅のごとく

惑星の憐憫は空を覆い尽くし

宇宙の悲哀は人類を押し流す

十字架の口唇が開き

悲鳴にも似た大気波が

漣のように形而上の世界に拡がる

アメジスト色に変わる天穹

鏤められた螺鈿の星屑雨は

災禍の色彩を携えて 鈍色の地上に降り注ぐ

17の厄災

紅い果実を食い尽くすように

圧縮と分裂を繰り返す

麗らかな資源と淡い遺伝子を溶かす

インバ

砕ける物語
 爆ぜる人生
 瓦解する宗教
 風化する魔術
 救済の無い長針
 安楽死する短針
 愛を語らず消える蟲
 終末を謳うことなく眠る獣
 冠を抱いたまま風化する王
 役割を放棄し串刺しにされる奴隷
 神に至ることなく朽ち果てる機械
 意思を持つことなく閉ざされる扉
 太陽は心臓を抜き取られ 奈落に至る
 月は脊髄を抉り出され 大気に水没する
 空は神々の血に染まり 羽虫のように落ちる天使
 海は霊長類の骨で埋まり 群青の王国は消え去る
 虚無の海は渦を巻き 乱立した四つの塔は崩れ落ちる

漂白された世界
 薄闇に変色した空
 永遠に変わらず浮遊する十字架
 白亜の大地に佇む 幾億の影法師
 陽炎のように 海月のように
 或いはレプリカのように
 ゆらゆらと ゆらゆらと 蠢き続ける
 万雷の喝采が鳴り響く
 カーテンコールは途切れることなく
 天幕は焼け落ち 全天の星は失墜する
 黒影たちは委ねた
 赤い罪を 暗い苦痛を
 全ての終末を



インバ

本名：岡村 薫
 1987 大阪生まれ
 奈良県在住
 龍谷大学文学部卒業
 青丹学園 関西学研医療福祉学院
 言語聴覚学科卒業
 現在 言語聴覚士として大阪で勤務
 第12回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
 第17回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞
 第19回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞

受賞の言葉

インバ

この度は「現代詩賞 優秀賞」に選出して頂き、ありがとうございます。私にとって詩を執筆することは、精神の安定や心の整理であり、生きていくためにどうしても必要な行為ではありません。それが評価され、このような賞を頂けるのは望外の喜びです。これからも慢心せず、詩と向き合い精進して参ります。あらためて、選者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

サイバー空間

柏原 宥

論理回路が刻印されたシリコン結晶

その集積密度が爆発的に高まっている

そして私たちが「蜘蛛の巣」と喩える世界は

複雑化と巨大化への趨勢を加速させている

シリコン結晶 論理回路のオンとオフ

多くの回路がオンと成すその瞬間には

サイバー空間の闇黒に強烈な閃光が走る

そしてカオスな蜘蛛の巣を

不気味に浮かび上がらせる

いまやこの異様な光景のなかに

時間 空間 生命 自然 科学 芸術

哲学 感情 幻想 モノ カネ ヒト

現実空間の事象・人事・属性のすべてが

絡め取られている

私たちは蜘蛛の巣に捕らえられた獲物

どんなにもがいてもあがいても

逃れることはできない

もがけばもがくほど

蜘蛛の糸が絡みついてくる

論理回路のオンとオフ

強烈なその閃光が

蜘蛛の糸に絡まった私たちを

不気味に浮かび上がらせている



柏原 宥

かいばら ゆう

1965 埼玉県川口市生まれ
システムエンジニア

2017 第12回 文芸思潮現代詩賞奨励賞

2018 第13回 文芸思潮現代詩賞優秀賞

2021 第16回 文芸思潮現代詩賞最優秀賞

受賞の言葉

柏原 宥

この度は優秀賞を頂きありがとうございます。この賞を励みとしてさらに精進していきます。詩作を通じて、人間とコンピュータの本質を詳らかにしていく、この姿勢を継続していきます。人間とは何か、あるいはコンピュータとは何か、その問いを常に深化させていきます。同じところに留まらない、常に洞察や思考を深めていく、その深化を作品の深化に繋げてく。私が文芸思潮の現代詩賞を通じて学ばせて頂いたこと、そのことをさらに深めていきたいと思えます。ありがとうございます。

沈んでいく舟を送るにも似た儀式でうむ

橘いづみ

遠い芝生の上で啄まれていた枝の先に潜むつぼみ
窓辺に寄る

既に赤らんでいる並木が揺れる

飛沫をあげていく往来の音

とんとんと胸を打つ日々の暮らし

たわむれに傾いて

接着剤が剥がれた骨董スツールの上ふたり

いつまでも変な筋肉を使いながらしがみついている

脚が折れてしまえば

いっそ捨てることもできるのに

みすぼらしく軋むこともなく

ただ均衡を失っては世間からも目を反らし

そんな場所で抱くひとを恨むのは自然なこと

痣の多くなった背

贅肉で覆う暇もなかった

だからわたしの肩にはいつしか枝が生え

ようやくこの春蠟梅の黄色な花をつけました

ジャスミンや乳酸の香のまじる髪をなびかせて

うっかり振り向いている通りすがりのあなたのをからめとる

時折現れる黒い斑点に

腐臭を見出さないのはあなたの方で

沈んでいく舟を送るにも似た儀式

わたしたちふたりして羊水に辿り着く

これでわたしたちついに戻れる

これまでこうして一つだったね

こうしていつもつながっていたね

取り戻したのはあなたでなくわたしの躰

膜にくるまれていまようやく大きな息を吐く

その首筋を包む腕に包まれているのはそのものひとつのわたし

白髪を隠さないしたごころ

彼方で列車が線路の枕木をまたぐ

幽かな汽笛

昼間の月

雨なのにぼっかりする

それを見上げているひとたちの深い結びつき

水溜りを泳ぐオレンジいろが跳ねるのに目を細めてくれる

あれはわたしの血を継ぐさかな

ママが生まれたからわたしはここにいます、といった紐落とし前の

おいでおいで生臭い

山茶花を嗅いで

そうしたものたちが歪まずにただそこにある朝を知る人らとながむ

二つ切りだと思っていた肩脊の蠟梅

隣同士寄り添って

ふたつずつよつつ

混じり合って生まれる

生まれ直している

スツールなど壊れてもよかったいいえ壊れたスツールを

ただ壊れているといえればよかったあなたに向かつて

おみくじを引く

おみくじを引く

動かしていく木箱の中

つまみ上げてひらく

何でもいいから押して

広げて

いまうみなおすから

受賞の言葉

橘いづみ

今年はとくに出し切った実感があるため、
栄えある賞を頂戴できたことに安堵しております。
この先もひとまず同じだけのエネルギーを注いでいくつもりですが、さらに
やわらかいものが引き出されるように自身を
耕しながら楽しみたいと思います。この度は
誠にありがとうございます。関係者の皆様に
心より御礼申し上げます。

橘いづみ

たちばな いづみ

1981年生まれ

幼少より執筆を続ける

2021年資生堂花椿文庫「煮魚を齧る」刊行

第17回・第18回文芸思潮現

代詩賞優秀賞受賞

第33回伊東静雄賞入選



或るレポオト

光枝初郎

言葉は世界を内包しなおも

世界は言葉から剥離されなければならぬ

世界は散文は昏き洞窟に隠され閉じ込められた

僕は不可能な形而上学を聴講する

ある晴れた水曜日の三コマ目の講義題目は

「光について」

言葉は思想を血肉しなおも

思想は言葉から切離されなくてはならない

思想はエネルギーだからだ

言葉は美であり、方向であり、延長であり、力であり、

言葉がエネルギーに化体しうるのは

可憐な子供の息吹を聴きとる者によってのみだ

その者によって書かれた言葉は

僕を煉獄の中で正気へと連れ戻す

思想は退廃していなければならぬ

思想は燃え尽きる松明の数秒手前の光だ

〈時〉が万物の理を告げ知らせ

貴女は一本の赤椿が熟れた実を落とす前に

急いで光に関するレポオトを完成させなくてはならない

思想は自由だなおも

不自由な思想はかくも美しい

不自由な言葉はかくもみじめだ

それでも言葉は蒼穹の空に無数の小鳥を放つであろう

不自由な思想は大地に根を張って

やがて風化してしまったのだから

赤椿は土地に根を張り

僕は僕たちを血肉の通ったDNAの連鎖を明証し

小鳥たちは白椿の実をひとつひとつ落下させる

世界は言葉は椿だらけとなってしまった

極北の夕暮れ オーロラの死！

ニイチエよ、

われわれは死すにはあまりにも疲れている……

思想は強度で塗固められなくてはならないなおも
言葉は弱者のための歌だ

言葉はロゴスに手が届かぬ者たちの狂い歌

僕は白樺の厚い葉肉の感触を確かめつつ

透明な針のごとく透き通った葉脈をひとつずつ引きちぎる

僕はエロスとサディズムのあいだにいる

植物は恋をするか、

一方的な片想いの意志なのか……

赤椿の花弁を一枚ずつ剥ぐと

夢の最期の香りが静寂を包んだ

なおも世界は散文によってありありと起立している

受賞の言葉

光枝初郎

この度は、このような嬉しい賞を受ける運びとなり、本当にありがとうございます。今まで公募に入選したこともなく、驚きとともに喜びを噛みしめています。来年もひとつ上を目指して懸命に励んでいこうと思います。選考委員会の全ての方に、感謝申し上げます。



光枝初郎

みつえだ ういろう

1989 岡山県生まれ
九州大学法学部中退
2023年に『「第一詩集」』電子版を出版

まだらな青い時

森下万尋

野生の叫びは はるかに消え
柔肌の 皮膚の悦びも
真春から夏の噴水のようなもの
血のたぎる炎 それは
いく千の昼を夜に変えてきた
でも まだらな青い時は
誉れ高きであろうとも
忍び入り 影を抜こうとする

つかの間の彩色の季
たとえ揺籃を覗くものが
慈眼を湛えていなかろうと
そのやわらかな唇は
時の水をすみやかに泳ぎ
一尾の生きものとなる

そして もの語る悦びをしる
白地の空に 詩人が言葉を吐き
糸車を回しつづける間にも
遠く 近くの かたがたで
緑あふれる地にキレッツが走る
累積する嘆きと 怒り
まだらな青い時が炎をあげる
せまる曲がり角
ふいに現れる首輪のない犬
直線を愛するものが
行進する

のこされる廃墟 ふり積もる灰
その静けさ
丘の上の海を望む石の行列
嘆きが 耳を穹へと

森下万尋

もりした まひろ

1949 埼玉県秩父郡生まれ
千葉県市川市在住、塾講師
64歳より詩を書き始める
平成29年度小泉八雲賞詩部門優
良賞
第15回日本詩歌句随筆評論協会
詩部門協会賞
第16回日本詩歌句随筆評論協会
詩部門優秀賞
第18回文芸思潮社現代詩佳作
同人誌「回遊」に所属
詩集「青い航跡」(2014)
「少年の日を求めて」(2017)
「五十音から湧き出る言葉の泉」
(2017)「胡桃の目覚め」(2018)
「燃え上がる水」(2019)
その他童話集、随想集など64歳
で詩と本格的に向き合う。
第16回文芸思潮現代詩賞優秀賞

受賞の言葉

森下万尋

詩を求めても、するりと逃げてしまおう。それは
幻の蝶のように、手作りの網で捕えようとする
が、捕まえたと思つて網を覗いてみるといいない。
こんなふうに詩とは何かを考えて書いています
が、いまだに確かなものをつかめていない気がい
たします。そんな詩を求める途上で、この度優秀
賞を頂きまして、勇気づけられるとともに、少し
前に進める気がいたします。ありがとうございます。



方言にならぬ方言を纏い
 工芸にならぬ工芸を象り
 お前は誰か
 その夜ひとり
 問うて問うて

お前ナイチャーか
 だからか

どこから来て
 どこまで自分か
 ひと筋ひと筋
 繭を解きほぐし
 たしかめたしかめ
 手繰り寄せ

ついに現れ
 カサリ転がる
 渴いた虫を
 潰し、剥ぎ、刻み

瑪瑙に膿んだ
 癌化した核を
 搾り、抉り、切り拓く

陽がにじみ
 芯などないと
 気づくとき
 はらの底から
 あたたかさが
 湧き出るとき
 果てなく広がり
 否応なく張り付く
 赤黒さ生臭さと
 抱き合うとき

わたしはたしかにここにいて
 わたしはわたしをかたついでい
 かたついでいいと
 しずかに
 ゆるされる

寄留民

幸地チカソ



受賞の言葉

沖繩に暮らして感じる喜びや葛藤を、言葉にする試みを日々続けています。思春期の頃から書き始めた詩は、初めは自分を保つためでしたが、今は自分にとって嘘のない時間、嘘のない世界を保つためのようになっています。いつかどこかで誰かと、花として、蛇として、世界そのものとして、出会うことのできる詩であればと思っています。

優秀賞をいただき、心から嬉しく思います。これからも書き続けていきます。ありがとうございます。

幸地チカソ

幸地チカソ

こうち ちかそ
 東京生まれ 沖縄県読谷村在住
 子ども、芸術文化分野の調査研究に携わりながら、ピアノ講師、アートセラピー的実践に取り組む慶應義塾大学理工学部卒業、同大学院修了
 第19回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞受賞
 2023 金澤詩人賞入選